

# 画像診断に基づく“攻めの”脳血管内治療

千葉大学大学院医学研究院 脳神経外科学 小林英一

1974年ロシアのSerbinenkoによる離脱式ラテックスバルーンを用いた脳動脈瘤塞栓術により幕を開けた脳血管内治療は、1980～1990年代の黎明期／発展期を経て、新たな展開を迎えつつある。その陰には、コイルテクノロジーや治療技術の飛躍的発展もさることながら、画像診断の進歩が大きく貢献している。FPD血管撮影装置の登場により、脳血管内治療医は“新たな目”を持つことになり、脳外科手術で例えるならルーペ時代から顕微鏡手術時代への転換期に似た歴史的展開をみせつつある。各種3次元画像やcone beam CT、3D road mapをはじめ、脳血流やflow dynamicsのリアルタイムな画像情報は、瞬時の判断を迫られる血管内治療医にとって大きな武器であり、ミリメートル単位以下の微細な手技を可能にしている。本講演では、最新の海外事情を盛り込みながら、画像診断を駆使した脳動脈瘤コイル塞栓術、頸動脈ステント留置術、脳および脊髄のシャント系疾患の塞栓術、急性期血栓回収治療等の現状と未来を、実際の症例を提示しながら概説する。